



さとのかぜ

2017年冬(No.200)号

発行:2017年12月25日

編集・発行 千葉県いすみ環境と文化のさとセンター

指定管理者:(一財)千葉県環境財団

〒298-0111 千葉県いすみ市万木 2050 番地

TEL 0470-86-5251 FAX 0470-86-5252

URL <http://www.isumi-sato.com/>

e-mail senta-sato@isumi-sato.com



2017/6/17 大多喜町 撮影者:須藤雅彦

半年ほど前、初めてミゾゴイ(サギ科)に出会いました。幸運でした。おそらく驚いて飛び上ったその鳥は、少し離れた木の横枝にとまり、赤褐色の羽をまとったその姿を見せてくれたのです。

昨年、環境省は「ミゾゴイ保護の進め方」を取りまとめました。ミゾゴイは春から夏に本州や四国、九州などの平地から低山帯で繁殖し、フィリピンなどに渡って越冬します。現在、ミゾゴイは北海道と沖縄県を除く都府県と国で絶滅危惧種に指定されています。ほぼ日本のみで繁殖する鳥であることから、本種の絶滅を防ぐためには、この国の繁殖環境を守っていかねばなりません。

ミゾゴイは、木々が覆う薄暗い谷の中の横枝に巣をかけ、採餌も主にこのような森の地面(林床)で行います。このため、比較的自然的豊かな地域に多いとされています。管理の行き届いた明るく開放的な森は、ミゾゴイには適さないようです。また、ミゾゴイは警戒心が強い鳥とされ、危険があると首を伸ばして静止し、自らを木の枝のように見せる行動(擬態)をすることが知られています。さえずりも、主に4月から5月の夜間であることから、身近な里山に暮らしていても人目にふれることが希な鳥なようです。

その生息有無に関わらず、ミゾゴイの暮らす環境を意識して保全に取り組むことは、より豊かな里山の自然を育むことにつながるのではないのでしょうか。

* 環境省自然環境局野生生物課. 2016. ミゾゴイ保護の進め方.

お茶の木、サザンカ、椿の木

いすみ市の細い道を歩いていますと、10月ごろに古くからの農家の生垣にお茶の木が植えられているのに気づきます。白く小さなお茶の花がうつむき加減で咲いています。図鑑で知っていたお茶の花をこちらに移住してきて初めて見ました。



茶の花

チャは花も葉もツバキを小型にしたような常緑樹でツバキの仲間です。夏も近づく十八夜の頃、その農家さんに頼み込んでお茶摘み体験をしたことがあります。摘んでからお茶にするまでの一連の作業を経験してみると、それは大変な作業量で気をつかいました。お茶の価格が高いのも思わず納得です。

昔、横山光輝の『三国志』（吉川英治原作）という漫画を読んだことがあります。その冒頭部分はまだ貧しい劉備が黄河のほとりにたたずみ洛陽からの船を眺める場面から始まります。年老いた母のために高価な薬草であるお茶というものを飲ませてやりたい、お茶を購入できる身分に出世したいと願う印象的な場面です。時代は後漢の末、日本では卑弥呼の少し前の話で、お茶もお茶の木も日本にはまだありませんでした。

やがて遣唐使の頃、皇族や高級貴族の間で茶が飲まれ、平安末期に禅宗とともに普及し始めます。そして、とうとう房総半島の農家の生垣にまで普及したのに、現代ではあまり利用されないとは実にもったいない話です。

11月になると市内のあちらこちらでサザンカの花が咲き始め、12月になるとツバキが咲き始めます。いすみ市の深堀地区ではツバキの生垣が多く、「ツバキの里」として散歩コースになっており、市役所裏手には「椿公園」があって、1000種類、1000本の椿が植樹されているといえます。

これだけ種類があると色は白・ピンク・赤とさまざま。花びらは一重も八重もあります。どれがサザンカかツバキかを区別するのは容易ではありません。

例外はあると思いますが、簡単に区別する方法を紹介します。まず、花びらが1枚ずつ散るので庭掃除が大変なのがサザンカ。1個の花として散るのがツバキで、首が落ちることを連想して武家には嫌われたと言いますが、嫌う武士ばかりではなかったようです。

次は葉の形。サザンカは谷折り、葉芯から二つ折になるような感じです。ツバキは全体に反り返って丸くなっており、どちらかという山折りです。

第三の区別点は葉の大きさ、形、色。ツバキの葉の方がやや大きく、ギザギザが鋭く、葉の色つやが良い。サザンカの葉はやや小型でギザギザが細かく低く、葉の色つやも心なしか薄い。もっともこれは二つ並べて比較しないといけません、慣れればなんとなく区別がつくようになります。



サザンカ

いすみ市に茶の木やサザンカ、ツバキの木が多いのは温暖な気候だからでしょう。ツバ

キの仲間は葉が厚くて光沢があり、常緑広葉樹で、温暖で夏季に雨量の多い照葉樹林帯に多く分布しています。



ツバキ

茶は中国渡来ですから日本でも中国と同じで茶という名称です。サザンカとツバキは昔から日本にある在来種で、日本の文化に関わりの深い植物です。

遣隋使、遣唐使の頃の数少ない日本の輸出品がツバキの実からとれるツバキ油でした。

隋や唐の首都・洛陽（西安）は大陸の中央で、北方系。ツバキの木は分布していなかったのが珍重されたようです。

存在しないものには名前がありません。それを示す漢字もありません。

そこで日本人がツバキにつけた漢字名が「海石榴」。“海外から来たザクロ”とでもいうような中国人向けの表記でした。

それにしても海石榴では意味不明ですから、やがて中国ではツバキを「山茶」、サザンカを「茶梅」というようになります。中国ではツバキを「椿」とは書きません。

椿とは古代中国の想像上の樹木「大椿」に由来します。大椿は超長寿の木で、花が咲き続けるのが 8000 年。枯れ果てるにはさらに 8000 年。

おめでたい長寿の木であり、寒い冬の時代に真っ赤な花を咲かせる常緑のツバキは新春を迎えるのにふさわしいとして「大」をはずして「椿」とした日本独自の表記です。

一方、サザンカの日本での漢字表記は「山茶花」。これではツバキの花の意味になり、発

音は、サンチャカになってしまいます。

それでも鎌倉・室町時代まではサンザカと読んでいたようですが、江戸中期ごろから語順がひっくり返ってサザンカになりました。サザンカの方が発音しやすいので、あっという間に広まりました。

椿という漢字が広まる前、日本でも日本書紀や万葉集では海石榴と書いてツバキと読んでいました。

三輪山のふもとにあった海石榴市（ツバキチ）は当時の物々交換の市場があった場所で、男女の歌垣の交流の場で、繁華街でもありました。

遣隋使の答礼として倭国を訪れた裴世清（はいせいせい）は海石榴市まで船で乗り付け、閲兵式にのぞみました。

蘇我氏と物部氏の宗教争いでは、物部氏が仏教を弾圧し、うら若い尼僧を捕らえて海石榴市にて僧の衣をはがしてむち打ちの刑に処したとあります。

ツバキを英語でカメリアということは割とよく知られています。

幕末の頃、フィリピン在住の宣教師カメルがヨーロッパに初めてツバキを紹介したことによります。

チャ（チャノキ）の学名は *Camellia sinensis* 中国のツバキの意味ですが、ツバキは *Camellia japonica* 日本のツバキ。サザンカは *Camellia sasanqua* サザンカのツバキと命名されています。

ツバキがヨーロッパに紹介されると東洋の神秘の花として絶大な評判を呼び、1853 年に発表されたヴェルディーのオペラ『椿姫』は大ヒットしました。

北斎や広重の浮世絵が大きなインパクトを与えたのもこの時期です。それはジャポニズムと呼ばれ一世を風靡しました。

絵画と比べるとジャポニズムの興隆にツバキが果たした役割は知られておりません。

正月のツバキを愛でながら、ツバキの偉大さに心を馳せるのも一興でしょう。

文：和泉在住 川口 和也

センターの畑～サトイモの話～

サトイモは、親芋に多くの子芋ができることから、子孫繁栄のシンボルとされ、正月の雑煮に入れる地方も多く、昔から日本人の食生活とは切り離せないものです。また、煮ころがしや、ふくめ煮に代表されるように、おふくろの味として、家庭料理には欠かせない食材です。本号では、こんなサトイモのお話です。

●サトイモの種類

・土垂（どたれ）

土垂は主に子芋を食用とする品種です。肉質がねっとりしていて柔らかく、煮くずれしにくいのが特徴です。晩生種で貯蔵性が良く、一年中出回っています。また栽培しやすいため家庭菜園でも人気があります。

・石川早生（いしかわわせ）

石川早生は土垂と並びサトイモの代表的な品種です。土垂と同様に子芋を収穫する品種で、やわらかく粘りがあり、蒸したり茹でたりすると、皮が簡単にむけるので、食べやすく、下ごしらえなど料理もしやすいのが特徴です。

・タケノコイモ

タケノコイモは地上に頭を出している姿がタケノコに似ていることから「タケノコイモ」と名づけられています。「京いも」という名称でも流通しています。小芋がほとんどできず、親芋が竹の子のように地上に頭を出します。煮くずれしにくく、煮物に最適です。

・海老芋（えびいも）

海老芋は反り返った形と表面の縞模様がエビのように見えることが名前の由来です。ホクホクした粉質で煮くずれしにくく独特な味わいがあります。エビイモは親芋、子芋、孫芋すべて食用となりますが、エビ状になっているのは主に子芋の部分です。

・セレベス

親芋子芋共に食用になり、子芋は大型で粘質、親芋は粉質と粘質の間ぐらいの口当たりで味はよく、おでんやうす味の煮物に向きます。収量が多い事でも知られています。芽が赤いのが特徴で、赤芽芋又は赤目芋とも呼ばれています。

・八つ頭（やつがしら）

八つ頭は子芋がほとんど分かれず固まりになってしまうので、全体に入り組んだ形で、皮を剥くのが面倒なサトイモですが、肉質は粉質でほくほくした食感で、味もよいためサトイモの中では高級品として人気があります。また、末広がり「八」と、子孫繁栄や人の「頭」になるようにという縁起物として正月のおせち料理や雑煮に入れる風習も残っています。

●サトイモの健康効果

サトイモの独特なぬめりはガラクタンという粘性物質によるもので、その栄養素には免疫力を高めガン細胞の増加を抑制する効果があり、サトイモを食べる事によってガンや潰瘍の予防に効果があると言われています。

また、サトイモのぬめりの中にはムチンという栄養素も含まれています。ムチンは、体内に入ると唾液腺を刺激して消化を助け、たんぱく質の消化吸収を助ける作用や、滋養強壮作用もあるとされています。

ガラクタンもムチンもサトイモのぬめりの中にある物質ですので、調理する前に洗い落としは効能も半減してしまいます。ぬめりをなるべく残すことがおすすめです。

さらに、サトイモにはカリウムが多く含まれています。カリウムには高血圧の予防改善や筋肉の収縮を保護する効果があるので、体の血流が良くなり高血圧やむくみなどを解消する事が期待できます。

●センターのサトイモ

センターでは、サトイモをイベントの材料や成長過程の観察用に栽培しています。種芋は、センターで種芋として保存してある土垂（どたれ）と、元センター職員から頂いた八つ頭（やつがしら）としました。

サトイモの栽培は、伸びてきた茎を定期的に追肥しながら土寄せする方法が一般的ですが、センターでは、サトイモが高温多湿を好むことから、地温の上昇や保湿の効果があり、さらに雑草の発生抑制も期待できるマルチ栽培を試みました。この栽培は植え付けた後にマルチをかけて、収穫まで追肥、土寄せ、除

草をする事無く育てるので大幅な省力化となります。

植え付けは、前もって苦土石灰、元肥及び化成肥料を施し深く耕した畝に、5月上旬に植え付けました。なお、植え付けの間隔は50cmで、20cmほどの深さに1個ずつ里芋の芽を上にして植え付け、覆土後黒マルチをかけました。5月下旬になると芽がでてマルチを突いて来たのでその部分のマルチを切って芽を外に出しました。



6月中旬になると、一つの株から何本も茎が出てきました。その茎が全て育つとイモの数は多くなりますが、小さなイモになってしまうので、親イモを1個だけにし、集中して肥料が効き、大きなサトイモが収穫できるように、最初に出てきた茎以外の茎は切り取りました。

7月上旬には、大型の蛾セスジスズメの幼虫の被害を受けました。セスジスズメの幼虫は、成長スピードが非常に早く数日で数倍の大きさに成長し、葉を食い荒らし、数日で畑が全滅することもあるといわれています。センターでは10数匹駆除しました。発見が早かったため、被害は一部ですみました。



その後は、8月の台風9号の影響で数株が倒伏しましたが、その他は順調に生長し12月



には収穫を迎えることができ、センター行事「米作り3・もちつきをしよう」で提供する味噌汁の具として、参加した皆様に喜んでもらいました。

参考：「最新園芸大辞典」誠文堂など

文：Y. T.

昔の生活道具～その三～

時代の移り変わりに伴って、昔の生活道具と今日の生活道具とを、比較すると当然のごとく想像もできないほどの進歩がみられます。昔使われた生活道具の一部で、実際に地元の方々が使われた物がセンターに展示されています。見学に訪れた方々は昔が懐かしいと感じられた様子でした。その中の一つを紹介します。

炭の文化

炭が日常生活においてどのように使われていたか振り返ってみました。

① 炭俵 (すみたわら)



江戸時代や明治、大正時代は炭が主な燃料でした。炭を入れる俵は「炭俵」(炭を詰める袋)と呼びました。

炭俵の底部分と蓋の素材は薄目の板状です。囲い部分はヨシやカヤで覆われて

います。同じ俵でも米俵は素材が藁で底や蓋の部分が円形(センダワラという)であることが特徴です。

② 炬燵 (炬燵の種類)

● 掘り炬燵 (ほりこたつ)

床を切って炉を設け櫓(やぐら)を置いた掘り炬燵(切り炬燵ともいいます)です。炬燵の熱も炭の時代がありました。



● 熾き炬燵 (おきこたつ)



木でできた櫓の中の火鉢に火のついた炭や豆炭を入れ、上に蓋をかけて手や足をいれて温まります。容易に移動することが

可能であることが特徴です。囲炉裏等でできた熾き火を、火箸で十能にかきこんで火鉢に入れ、暖をとりました。囲炉裏から炬燵へと、再利用ですね。

③火鉢



中に灰を入れ炭火を入れて手先を温めたり、お湯を沸かしたり、モチを焼いたりしました。また小型のアイロンを熱したりと、暖を取る以外にもさまざまな使い方があり、炭は生活になくはない存在でした。現代では石油やガス、電気が普及し、火鉢と炭の出番は少なくなっています。

④鑊（こて）

火鉢などの炭火の中に先のとがった金属の部分を入れ、直接熱して使います。衣服の布やしわを伸ばし



たり、折り目をつけるときに使いました。冷めてしまったらまた炭火の中に入れて熱します。裁縫や手芸で用いる小型のアイロンです。この鑊は長さ 35cm、重さ 300g ほどです。



⑤囲炉裏（いろり）

屋内に恒久的に設けられる炉の一種で、伝統的な日本家屋において床を四角に切って開け、灰を敷き詰め、薪や炭火を利用して湯を沸かしたり、煮物や暖をとるために利用しました。

屋内に恒久的に設けられる炉の一種で、伝統的な日本家屋において床を四角

センターでは工作室に囲炉裏が設置されており、行事において暖を取る場合等に活用しています。なんとも言えない風情があります。

文：T. S.

大多喜町で出あった植物

旧夷隅郡（概ね現在の勝浦市、いすみ市、大多喜町、御宿町）は、主に太平洋へ注ぐ夷隅川と塩田川をはじめとする小河川の流域で構成されていますが、大多喜町だけは東京湾へ注ぐ養老川の流域（町の 3 割位）を持ちます。大多喜町西側地域は、標高 300m を超える丘陵地（清澄山山塊ともいわれる）の一部で、養老川上流及びその支流が渓谷をなしています。養老川流域は、夷隅川流域などに比べて平均標高が高く、起伏量も大きいことが特徴です。

今回は、清澄山東に位置する麻綿原高原から北東側へ広がる大多喜町で、私的な散策中に出あった植物をいくつかご紹介したいと思います。

イヌガシ クスノキ科 県 RL: 重要保護生物(B)

照葉樹林などに見られる常緑樹で、高木に生長するようですが、観察は樹高 2~4m 程度の個体で、林内や林縁に見られました。葉だけであると同じクスノキ科のヤブニッケイなどとの見分けは簡単ではないのですが、早春に暗紅紫色の花を咲かせることが特徴的です（雌雄異株）。本種の暗紅紫色の花は、フサザクラ、キブシ、ヤマドリソウなどと共に、清澄山周辺の春を彩ってくれます。



イヌガシ(雌花) 2015/3/17

本種は、千葉県植物誌（2003）で清澄山周辺部のみに記録され、千葉県ではもともと希産種のようなです。私の確認も記憶の限り狭い範囲に少数です。県 RDB（2009）までは選定されていませんでしたが、今年度改定の県 RL（2017）では重要保護生物に新規追加されました。

オニルリソウ ムラサキ科 県 RL: 最重要保護生物(A)

2013 年の秋、県 RDB をめぐっていると私の生まれ年の標本写真が目にとまりました。浅野貞夫氏によって 1963 年に清澄山で採取されたオニルリソウです。特徴的なサソリ状花序を持つ本種であれば、植物の知識が乏しい私でも分るだろうと思い、散策時の目標に加えると、直ぐにご対面。長く伸びたサソリ状花序に、たくさんの果実をつけていました。50 歳の良き思い出です。

本種の果実には刺があり良く衣類につきまします。観察時手袋にたくさんの種子が付いたので、自宅のプランタに播種すると、良く発芽して花を付けた個体もありました。



オニルリソウ 2013/10/13

この育成個体と現地生育個体の観察では、秋に発芽して、二冬をロゼット状のまま生活して花をつける個体(二年草)



オニルリソウ(花序) 2014/9/22

と、一冬のみロゼット状で生活して翌年花をつける個体(越年草)が見られました。花期は主に8~10月でした。懸念されるのは、シカやノウサギなどと思われる被食圧で、ロゼット状の根生葉や立ち上がった茎葉も良く食べられています。

現在まで私のオニルリソウの確認は、比較的明るいスギ植林内とその林縁部(路傍)です。その後、清澄山周辺を丹念に歩いていますが、2013年、2014年に生育が確認された狭い範囲だけで新たな産地は見つかりません。

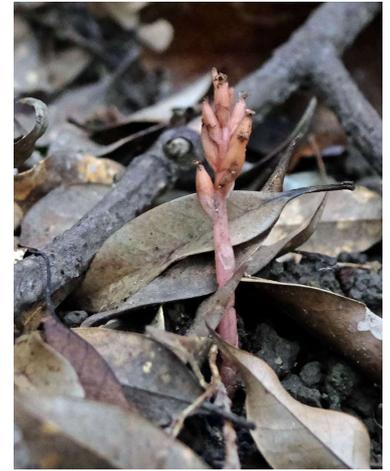
ヒメノヤガラ ラン科 県RL:最重要保護生物(A)

草丈5~15cm位の小さな植物で多年生草本。花期は7~8月、菌類から栄養を得ている植物(菌従属栄養植物)です。光合成を行わない無葉緑植物で、その姿は、一見、キノコ類と見間違いそうです。小さく見つけづらい植物ですが、2016年、2017年と大多喜町で出あいました。この確認は2箇所計3個体です。生育地の1箇所は沢沿い、もう1箇所は尾根近くの斜面で、共にモミの見られる林でした。

光合成をやめて栄養を菌類に依存しているヒメノヤガラの姿を見ていると、地面の下に広がる菌類と植物のネットワークを認識させてくれます。また、個々の植物だけに目を奪われることなく自

然の構成要素全体を守っていくことの重要性を再認識させてくれます。

最後に、大多喜町で出あったラン科植物をいくつか記しておきます。ムヨウラン、アケボノシュスラン、オオシマシュスラン、ナギラン、セッコク、マメヅタランなど、県内の保護上重要な種が数多く生育しています。



ヒメノヤガラ(落花後)2017/9/3

県内でも気候や地形、土地利用等の違いにより、生育する植物の構成に違いがあります。これが豊かな生物多様性を支えています。県内様々な地域の自然への関心と共に、保護上重要な植物達へも思いを寄せていただければと思います。

千葉県植物誌:千葉県史料研究財団編集. 2003. 千葉県の自然誌 別編 4 千葉県植物誌. 千葉県

県RDB:千葉県レッドデータブック改定委員会(編). 2009. 千葉県の保護上重要な野生生物 -千葉県レッドデータブック- 植物・菌類編 2009年改定版. 千葉県環境生活部自然保護課

県RL:千葉県環境生活部自然保護課(編). 2017. 千葉県の保護上重要な野生生物 -千葉県レッドリスト植物・菌類編- 2017年改訂版. 千葉県環境生活部自然保護課

環境省RL:環境省. 2017. 環境省レッドリスト2017

<http://www.env.go.jp/press/files/jp/105449.pdf>

注)写真は全て大多喜町内の生育個体 撮影者:須藤雅彦

文: M. S.

これからの行事案内

1月

(受付中)

●ススキでミニほうきを作ろう

14日(日) 9:30~12:00 定員20名 雨天中止
ススキやオギを取り、枯穂を使ってミニほうきを作りましょう。
持ち物:剪定バサミ、軍手、作業できる寒くない服装



▲参加費(300円)

●米作り7・わらづと納豆を作ろう

20日(土) 9:30~12:30 定員15名
自分でわらを編んで、有機大豆でわらづと納豆を作りましょう。
参加対象:中学生以上
持ち物:植木バサミ、新聞紙、バスタオル、使い捨てカイロ(貼れないタイプ)、寒くない服装 ▲参加費(500円)



●里山の鳥の観察

28日(日) 8:30~12:00 定員20名 雨天中止
里山にはどんな鳥がいるでしょう?
観察に行きましょう。
持ち物:寒くない服装、里山を歩く靴、観察道具(あれば)
場所:センター周辺



2月

(受付中)

●水辺の鳥の観察

4日(日) 8:30~12:00 定員20名 雨天中止
水辺にはどんな鳥がいるでしょう?
観察に行きましょう。
持ち物:寒くない服装、里山を歩く靴、観察道具(あれば)
場所:堰や夷隅川河口周辺



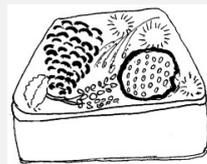
●そばうち体験

10日(土) 10:00~14:00 定員 15名
そばを自分で打って、皆で味わいましょう。
参加対象:中学生以上
場所:現地集合
(受付時にご案内します)
持ち物:ボウル(30cm以上)、割烹着、
頭巾、タオル、持帰り用容器 ▲参加費(1,000円)



●花炭を作ろう

17日(土) 9:30~12:30 定員 20名 雨天中止
いろいろなものを使って「花炭
焼き」に挑戦しましょう。
参加対象:中学生以上
持ち物:花炭材料(ハス、マツボック
リなど) 軍手 うちわ ふた付空缶
箱 ▲参加費(300円)



3月

(1月5日から受付開始)

●トウキョウサンショウウオの卵のうを見つけよう

4日(日) 10:00~12:00 定員 20名 小雨決行
トウキョウサンショウウオの卵のうを
探し観察します。(卵のうや成体の
採捕はできません)
持ち物:長靴、寒くない汚れてもよい服装、雨具



☆4月以降の行事予定は当センターのWebサイトを
ご覧ください。3月に発表予定です。
<http://www.isumi-sato.com/gyouzi.html>

行事への参加申し込み方法

- *お申込みは、電話(0470-86-5251)、eメール(senta-sato@isumi-sato.com)、FAX(0470-86-5252)、または直接センター事務室でお申し込みください。なお、イベント開始月の2ヶ月前の1日9:00から受付です(1日が休館日の場合は翌日、1月は5日から受付です)。
- *お申込み時は、参加者全員の氏名、住所、年齢、電話番号(携帯電話がある方は併記)を記載ください。なお、メールやFAXでの申込みでセンターから返信が無い場合、送受信エラーを疑い、確認のお電話を下さい。
- ※定員のあるものについては、定員になり次第締め切らせていただきます。ご了承ください。
- ※小学生以下のお子様は保護者同伴で参加ください。 ※費用の記入がないものは、無料です
- ※行事は原則ネイチャーセンターに一度集合してから移動します。

いすみ楊枝 —千葉県伝統工芸品—

センターでは、「いすみ楊枝」を県内外に広く紹介するため、毎月高木守人氏に実演をお願いしています。

日 時 毎月第3日曜日(9:30~16:00)
場 所 ネイチャーセンター
講 師 高木守人 氏
参加料 材料費など実費いただきます
内 容 楊枝・花入れ・茶杓作り など

編集後記 さとのかぜは今号で、区切りの良い200号。200号は師走の忙しい折にお届けすることになりました。お正月休みなどを利用して、ゆっくりとお読みいただければ幸いです。

少しだけフライングですが、今年も無事に過ごせました。ボランティアをはじめとする関係各位にはたいへんお世話になりました。また、ご来館くださった個人、団体の皆様にも感謝、感謝です。

新年(平成30年)1月から3月にも複数の行事を予定しています。当センターには昔懐かしいペーゴマなどもまわせるように展示もしています。また、冬から早春の自然や文化との触れあいにも、ぜひ当センターをご利用ください。 所長

◆ ◆ ◆ 利用案内 ◆ ◆ ◆

休館日: 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日)、12月28日~翌年1月4日
開館時間: 9:00~16:30 (7/20~8/31は17:00まで)
入館料: 無料

- ※当施設のご案内や解説などを希望される団体は、2週間前までにお申し込み下さい。
- ※行事やガイドを申し込み後、都合によりキャンセルする場合は必ず早めにセンターまでご連絡ください。
- ☆過去の行事内容やセンターの日常を、センター日誌(<http://isumisato.exblog.jp/>)にてご覧いただけます。